

愛馬と共にした北満の思い出

秋田県 山内 佐吉

(旧姓 松川)

私は、大正八（一九一九）年十二月二十八日、松川家の三男として産声をあげました。父は昭和十四（一九三九）年八月に病死、母は五反歩の畑で大豆を栽培して、豆腐の製造小売業、長男は銅鉱石生産日本一の花岡鉱山に電気技術者として汽車での通勤、同じ鉱山の坑内で働く次男、母を助ける妹の五人家族で、一人の姉は他家へ嫁入りしていました。夫は既に戦死していました。

入隊当時の故郷は、青森県境に位置する農村地帯で、隣り合う大館、花岡と共に林業、鉱業関係者も多く活気がありました。また、観光地の十和田湖への通り道でもあり、多くの温泉旅館、ホテルが点在していました。そして長木村尋常高等小学校を卒業、次いで大館町立青年学校（夜間部）

を卒業し、大館町御成町にある「櫻月堂」という和菓子製造の見習として勤務していました。

徴兵検査は、昭和十五年七月、部落から同級生と二人、一年下級生三人の計五人が受け、検査の結果、甲種合格三人、丙種合格一人私は第一乙種合格でした。検査官より「君は海軍に適しているが、身長の関係で兵科は輜重兵」と言われました。当時の世相では軍人になることは男子の本懐でありましたので、第一乙種でも必ず召集令状はくるからと励まされ、記念写真を撮り、その日は、夜遅くまで祝杯を上げました。

昭和十六年七月、待ちに待った臨時召集令状が長木村長より届けられました。時局重大な時節柄、入隊は国民の当然の義務として家族も覚悟しておりました。

昭和十六年七月三十一日、当時戦争が激しくなり、以前のように幟や日の丸、太鼓笛等の音楽隊などで見送ることは防諜上禁止されていましたので、ひっそりと姉と二人で大館駅から入隊部隊所

在地の秋田市へ向いました。当日は秋田第十七部隊第二大隊長笠原中佐宅に一泊（笠原大隊長は戦死した姉の夫の上官で、夫の生前から親族同様のお付き合いさせていただいたので、奥様のご好意でお世話になる）しました。

翌八月一日朝、第十七部隊の門をくぐると衛兵から祝いと激励の言葉を頂き身の締まる思いがしました。そして真新しい軍服を渡され、私服と着替え、私服は姉に渡しました。これで娑婆とは縁が切れ、初年兵として頭や気持ちを切り替えました。

同日第二大隊行李班に編入されました。隊長は昨夜お世話になった笠原中佐で、偶然にも義兄と同じ上官の下で軍務に服することができる幸せに、義兄同様可愛がられる部下になるように努力することを心に誓いました。また、先輩が来て「入隊おめでとう、お前等は近く満州へ行くことを知っているか、満州では、関東軍精神を注入されるから覚悟して行くように」と言い立ち去りました。

八月二日、初めての軍隊生活の夜が明け、起床ラッパで起床、朝の点呼、洗顔して飯揚げがあり、食事当番以外は輜重兵の主要業務である馬の手入れ、餌付けのため地方から徴用された馬の仮厩舎へ駆け足でゆく。馬当番の上等兵ほか古年兵から指導を受けましたが、初めて馬に触れる者が多く、恐る恐るで、特に蹄の手入れには私をはじめとして皆大変のようでした。先輩から「馬は銃砲同様兵器である。自身の世話より先ず馬の餌付け、手入れをし馬の健康管理に当るよう」に言われました。馬によっては、悪い癖がある。例えば、噛み付く、蹴る、抱き込む（前両足上げ被さる）ような癖のある馬は、百頭中十頭ぐらいいて、私も噛まれたり蹴られたこともありました。大事にならず助かりました。中には、運悪く大怪我をした仲間もありました。

とくに前述の通り、馬は輜重隊の貴重な兵器ですので毎日朝夕の世話は欠かせません。要領の悪い者、動作の鈍い者は、自分の洗面、食事も落ち

着いて出来ないほどの地獄社会で、私も入隊前は馬とは一切縁が無かったのですが、先輩の親切な指導を受け、何とか先輩並みにこなせるようになりました。

八月十五日、ソ満国境警備要員として転出命令が発令され、同日秋田駅より有蓋貨車一車両に馬八頭を乗せ、馬と共に夕刻出発、翌日大阪港に到着し、仮厩舎で休息となりました。

八月十八日、貨物船（戦時標準船三、〇〇〇トン）に馬と共に乗船、大阪港出航、玄界灘の荒波に揉まれながら釜山港へ向け、八月二十一日、釜山港上陸、有蓋貨車に馬十二頭を乗せて休息することなく出発、八月二十四日、鮮満国境安東通過、三十一日夕刻、満州国黒河省山神府駅に到着、同日第一一七部隊第二六隊本部に編入され、同地の警備に就きました。

しかし当日は兵舎の受け入れ態勢が整っていないので野宿となりました。九月前ですが夜中は冷えてなかなか寝付けませんでした。先輩の話によ

れば、当地は北緯五三度の満州国最北端で、冬期は零下五〇度ぐらいまで下がることも度々あるとこのことで、東北の秋田で育った私どもですら吃驚しました。

翌日、新兵舎が完成、午後からそれぞれの内務班に落着きました。兵舎は新築の煉瓦造りで、暖房は初めて見る石炭を燃料とする「ペーチカ」でした。

そして九月二十日には、八月二十五日から国境討伐作戦に参加している先輩兵に合流しました。入隊間もない私達は馬の手入れだけは何とか一人前になったのですが、作戦のための軍事訓練はほとんど受けていないので、戸惑いながら昭和十七年一月五日まで勤務しました。このためその後の毎日は、遅れをとるため猛訓練でした。

八月に入って大隊本部指揮班の夏井上等兵が内務班に来て「笠原大隊長が至急大隊長室に来るように」とのことでした。早速、大隊長室に入りますと、隊長から「ご苦労、実は俺は吉良少佐と交

替して錦洲に転出することになった。君の義兄は優秀な軍人であった、兄同様君を最後まで見てやりたかったが残念だ、これも国の命令で仕様がな
い、兄に恥じないように軍務に精励するように、
吉良少佐にも頼んでいくから」と身に余るお言葉を
をいただき、義兄に恥じないように頑張ることを
誓い、退室しました。

義兄は射撃の名手で、秋田県を代表して明治十二年
宮の射撃競技大会で優秀な成績で表彰され、昭和十二年
応召し、笠原大隊の旗手を務めて、昭和十二年八月北支で戦死しました。

冬期、人馬の飲料水には苦勞しました。零下四〇度ともなれば水道が凍結、断水して自然に溶けるまで、河の水を使用するほかありません。その河は幅千メートルもある黒竜江で、深さ五メートルぐらいまで凍結しており、工兵隊が川岸から昇降出来る階段を付けて掘り下げ、氷盤下からバケツリレーで河水を汲み上げ兵舎と厩舎に運搬しました。河が凍ると戦車も走れません。監視哨の勤務

兵によりますと対岸の国境線近くまで行くと肉眼でソ連の兵舎、兵の行動等良く見えるとのことでした。

またある日、奇遇にも、この広い北満の地で実兄鉄之助と会うことが出来、互いに無事を喜び合いました。しかし兄は、演習中に怪我しており、他隊の所属でしたが、隊長の好意で医務室での付き添いが許され、全治後、互いに元気で復員することを誓い合い別れました。

昭和二十年四月八日、部隊が内地に移動することが発令されました。戦況は刻々悪化していることを感じるようになりました。部隊移動に当たり連隊長は高木大佐から田中大佐へ、大隊長は吉良少佐から服部大尉へと交替となりました。

今までの軍隊生活を振り返りますと、私的制裁は入隊前に聞かされていた通り、関東軍特有の精神注入と理由付ける、殴る、蹴る等想像以上でしたが、私の場合笠原大隊長との関係を知っているためか殴るにしても他の兵より手加減され、また

被服係助手、兵器係助手、人事係助手、初年兵教育係などの事務系勤務で恵まれた兵隊であったと感謝しております。

私の担当した愛馬は次の三頭でした。

輓馬 西根号 高齢によりジャムス(南支)病

馬廠へ

輓馬 勝海号

乗馬 天竜号 初年兵教育時の乗馬

山神府を去ることに当たり、思い出が走馬灯のように駆け巡りました。チチハルで馬と共に大河を渡る渡河演習、見果てぬ湿地帯での湿地突破演習には、馬の足が瞬時に泥に埋もれ身動き出来なくなるので随分苦労したこと、演習中に広野を突っ走るノロ鹿の群れの風景、山狩りして猿を生け捕りしたこと、冬期演習では雪を解かして飯盒炊さんする際、ノロ鹿の糞が多く綺麗な雪探しに苦労したこと、寒さに慣れない初年兵が演習中に凍傷になり手足の指を切断した者がいたこと等等など、尽きぬ思い出がありました。

昭和二十年四月十日、山神府を出発、朝鮮清津港で貨物船に乗船、二十三日、博多港上陸、福岡県筑紫郡大野村上大利に到着して博多港警備第十六方面軍の指揮下に入り、福岡周辺の作戦準備に従事しました。そして我々部隊は分散して、それぞれ山地に入り、陣地構築作業に従事しましたが、食糧不足には悩まされました。

昭和二十年八月十四日午後六時、「全員本部前集合」の伝達あり、大隊長はいつもと違う言い方で「明日は重大ニュースがラジオ放送される予定だから必ず聞くように、聞いても動揺しないように、なお明日は全作業中止せよ」とだけの話で集会は終わりました。翌八月十五日、ラジオの前に集合、雑音の多い玉音放送を聞く。皆呆然としてなすこと知らずでした。

博多には不満分子による暴行や迫害の聲がかなたから聞こえてきました。敗戦の悲惨さを分け合いい、新日本建設のため元気で別れようと、当時第二機関銃隊にいた俳優、秋田県出身の大坂志郎氏

から芸の指導を受け、九月二十日、当地の小学校講堂を借りて、駐屯している隊員全員に呼び掛け、大坂氏から教わった劇をはじめ各人の隠し芸を出し合つて盛大に慰安会を行いました。

その時私が朗読した文を披露します。

奥第七二七部隊、思い出の山神府

あたふたと住み慣れた山神府に別れを告げてから数カ月の月日が流れた。思えば我ら将兵を久しく抱擁し相育んでくれたかの山神府は北満の淋しい一天地ではあつたが、今遠く別れて来て、しかも再び踏むこと出来ぬかも知れぬ今日、静かに振り返つてみれば我らの胸には走馬灯のように次々と懐かしい思い出が巡ってくる。分けても我らに印象を残すのは何といつても、あの冬將軍ではなかつたと思う、体感温度零下六〇度ともなれば、防寒帽、防寒覆面、防寒脚絆、防寒靴、防寒外套と「ダルマ」のごとく着込んで寒かつた。

この寒中に何んらかの理由を付けられて夜の点呼後、野外での一〜二時間の不動の姿勢、これに

は閉口した。また、冬期演習の夜も大変でした。二〜三俵の木炭を同時に燃やして暖をとつても寒くてなかなか寝付けない、特に既舎当番は大変だつた。

しかし辛いことばかりではなかつた、師団長官邸裏のスロープで雪煙りを上げて滑るスキートの爽快さは格別で苦労は吹っ飛んだ。北満の果てといえ五月ともなれば岩石のごとき氷も溶け初めて道路面も乾いて埃が立ち上る、日中は高所から氷溶け雫、山野は緑ついて我々の心を和らげてくれる。

我々の部隊で野菜類を現地自活しておりまして、秋の収穫期が待ち遠しかつた。作物の種類は、馬鈴薯、キャベツ、西瓜等数種類で、収穫したキャベツ等を飯盒に詰め湯沸かし場で、こっそり煮て食べた自己流の料理のおいしさは我らには一生忘れられない思い出の一つである。また、一望千里の緑の広野には春から秋にわたり咲き競う赤、黄、青色等各色の花畑の壮観さは、演習や陣地構築作

業で行き来する我々に優しく楽しませてくれました。
た。

このような境遇の思い出を共有する同志よ今残念にも戦い敗れて相愛の契りを東へ西へと分かれなければならぬ。例え身が離れ離れになつても、共にあの山神府の天地に思い出の情を馳せることあつたなら、その時こそは申し合わせでもしてあるかのように、合ひ言葉でもしてあるかのように、関東軍の精鋭として情感の信頼を受けて奥第七二一七部隊の将兵たりしことを思い起し、覚悟を新たに前進の苦難に突き進んで行こうではないか。

そして今やこの愛しい姿の祖国日本を再建するのは我らなんだと自重して、朝な夕なに歌い慣れた部隊歌を歌いながら、新日本建設の原動力となるよう誓ひ合ひましょう。我らのあの山神府の思い出、しいては祖国日本の再建の熱情に点火する誘因たらしむべく、お互い誓ひ合つて涙を押さえてお別れしましょう。あゝあの丘に掘つた交通壕よ、あの山に築いた戦車壕よ今はいかにありや、あゝ

奥七二一七部隊のみに恵まれた北滿の別天地山神府の思い出よ、あゝ誰か山神府を思はざる、誰か山神府を忘れざる。

自作賛歌

誰か山神府を思わざる（曲 誰か故郷を思わざる）

一 演習終えて日が暮れて

みんなで軍歌やりながら

いくど歩いた矢立山

満人部落のあの姑娘よ

あゝ誰か山神府を思わざる

以下略

復員は昭和二十年十月四日、お別れの慰安素人演芸会も笑いの止まらない盛大な爆笑会となり無事終了し、残務整理、復員手続きを完了、二日、福岡を出発して途中汽車内で一泊、夕刻我が家に着きました。

四年前と変わらない元気な母の姿を見て安心しました。母の顔の皺しわが増え、男がおらないので女手一つで稲作、豆腐製造等に親類や村の方々のご

支援ご協力を受けたにしろ、随分と苦労したと思われしました。

復員後の十月末兄二人が復員して四人家族となり、私は十二月二十日縁があつて山内家に婿養子に入りました。山内家は中程度の農家で、酒類、鮮魚、雑貨店も兼業でしていましたので、しばらく手伝いして、昭和二十五年四月から四十一年三月末まで公立総合大館病院に勤務し庶務課長で定年退職しました。

現在、長男死亡後、商店は閉鎖、田地も他人に耕作を依頼して、趣味で始めた五十年來の川柳の作句をして地方新聞への投稿を楽しんでいます。

最後にいつまでも平和で美しい国であること願う者です。

私の軍隊生活

茨城県 房前 雄三郎

水戸黄門で名高い水戸市南町の房前家に六人兄弟の三男として生れた私は、両親が理髪店を営んでいたもので、水戸市の三の丸尋常高等小学校を卒業すると、両親に教えられて理髪業を手伝っていました。

昭和十三（一九三八）年五月、徴兵検査が実施され、結果は第二乙種合格でした。支那事変以後戦局は拡大し、同年輩の人々は召集令状が来て支那大陸等に出征するようになりました。私は第二乙種だからまだ召集はないだろうと思っていました。第一補充兵に繰り上げされ、昭和十四年五月に召集令状が来て、水戸歩兵第三十七連隊に入隊せよとのことでした。当時は「祝出征」と大きな幟を家の前に何本も立てて、町内の大勢の方の見送りにて感きわまつたものでした。